# 噂の側室

ジグマ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
噂の側室

【Ｎコード】
Ｎ８２３５Ｚ

【作者名】
ジグマ

【あらすじ】
王城で囁かれている噂は、見た目以外芳しくないものばかり。
そんな悪名ばかりが目立つ側室の話。

## はじまりの噂

【東のフォレスタ国】

と聞けば、知っている者ならば皆こう言うだろう。
とても緑が豊かで資源が豊富な国、と。
町は貿易で栄え、どこか古き街並みを感じさせる城下町はとても温かい雰囲気だと。

そしてもう一つ。
唯一悪い噂もある。
それは側室、レオナ・フライトだ。

緩やかに波打つ艶やかな黒髪、少しだけ吊り上がった大きな瞳は優雅な瑠璃色。
肌は陶器のように白く滑らかできめ細かく、紅をささずともほんのり色づいた唇は艶がありふっくらとしている。
姿に関してはまったく問題はない。むしろ数いる側室の中でも飛びぬけて可愛らしい容姿だったりする。

血筋もいい、なんせ先々代の国王がずいぶんと年を召してからひそかに生ませた庶子だ。
まあ母親は庶民ではあるが、直系の血を引く娘は多くはない。
年は今年で１８歳になり、老いているわけでもない。

ではなにが問題なのか、それは間違いなく彼女自身だ。
派手な顔つきに見合った煌びやかなドレスと宝石を常に身にまとい、

夜会があればさらにその豪勢さに磨きがかかる。
それも一度着たものは2度と着ないという徹底ぶり。
宝石に関してもしかりだ。
他の側室たちには「贅沢が生き甲斐では？」といわれている。

とはいっても彼女はあまり奥の離宮から出てくることはない。
だがまたそれが怪しいと、噂に拍車がかかっている。
国王以外の男と褥を共にしている、気に入った近衛を囲っているなど、さまざまな憶測が飛び交っている。

ついでにその食欲もまたすごいという。
朝夕は一食でいいというが、昼食はなんと１０人前を平らげてしまうという。
小柄な彼女のどこにそんな大量の食事が収まるのか、宮廷ではもっぱらの噂だった。

そんなレオナ・フライト。
フォレスタ国王の側室。
いい噂はほぼない。

この物語の主人公である。

## 噂と実状？

レオナ・フライトといえば、王城での噂はもっぱら悪女やら贅沢妃やら、そんなのがほとんどの側室だ。
まれに姿形だけはいい、といわれることもある。
まあ「だけは」というところが、単に褒めている言葉ではないとわかるだろう。
着飾ることをなによりも愛する少しおつむの弱い側室だと、周りはひそかに声を合わせて彼女を笑う。

そんな彼女の朝は、他の側室より早い。
本来侍女付きの身分の高いものは、彼女らが起こしに来るまでベッドから出ないものだが彼女は違う。
侍女が来る前に自らクローゼットを開けて、その日のドレスから髪飾り、アクセサリー、靴その他小物全般を選ぶことから始まる。
何度もレオナ付きの侍女がそのような真似はしないでほしいと言っても、彼女は頑として首を縦に振ることはなかった。

「さて、今日はどうしましょう」

今日も侍女がやってくる前に起床し、開けたクローゼットの前にレオナは立っている。
目の前にかかっているドレスはたったの5着。
午前中に公務があるから、特に煌びやかなものを選ばなくては。
しかも今日の公務は国王の隣に立つのだ、いつも以上に気をつけねばならない。

「ドレスはこれでいいわね、あと靴は…、髪飾りはどれがいいかし

ら」

靴も髪飾りもアクセサリーすらも、贅沢妃といわれるほどの数は持ち合わせてはいなかった。
どれも両手で足りるほどの数で、彼女は悩みつつも選んでいく。

選んだ一切をドレッサーの前のテーブルに置く。
今日はとても晴れていて日差しが眩しいから、それに合わせて白色をメインにコーディネートしてみた。
真珠と繊細なレースをふんだんに使った光沢のあるドレスに、同じく真珠をあしらった髪飾りとピアス。
首元にはレオナの瞳と同色の、大粒のラピスラズリのついたチョーカーを。
少しでも低い背をカバーするために、靴はヒールの高いものにした。
ついでにこれなら脚を長く美しく見せることもできる。

いくぶんシンプルな気もするが、たまにはこういった素材を生かした服装もいいだろう。
もともとレオナはシンプルなほうが好きだ。

時計を見ればまもなく侍女がやってくる時間だ。
そのときを待ちつつ、レオナは自ら櫛を取り髪を梳く。
少し癖のある髪ながら、毎日寝る前にローズオイルを染み込ませているので絡むことなく滑らかに櫛が通る。
自分の衣服を選ぶことと同様に、髪梳きも彼女の大事な一日の習慣だった。

一櫛梳くたびに、レオナは自身に言い聞かせる。
これからはじまる一日は、【側室、レオナ・フライト】なのだと。

## 噂と実状？

コンコンと控えめに扉をノックする音が聞こえた。

レオナは髪を梳いていた手をゆっくりと止める。
目を閉じ、これからはじまる一日をすでに疲弊したといわんばかりに嘆息してから、意識を切り替えるようにあえて明るい声を出す。
唯一の長所と噂れている綺麗な顔に、他者を惹きつける妖艶な笑顔を貼り付けることも忘れない。

「どうぞ、お入りになって」
「失礼します。レオナ様、おはようございます」
「おはよう」

静かに扉が開けられ、現れたのは侍女だ。
レオナが側室として王城に上がってからの約半年の付き合いだが、典型的な主従関係だけで友人のような気安さはない。
レオナは彼女に心を開こうと思っていないし、侍女もそうだろう。
お互い挨拶や必要な事柄を言うだけで、それ以上話すことはほぼない。

「またそのように自ら衣装をお選びになって…、それらはわたくしたち侍女の仕事にございます」
「こればかりは譲れないわ」

この会話も必要なこと。
側室として、身分の高い人間のすべきことではないとやんわりと指摘する。
それに主が首を縦に振るかはまた別問題だが、侍女の仕事だ。

けれどさすがにこの会話を数ヶ月毎日やれば、相手も諦めてきているようで、それ以上なにもいうことはなかった。

侍女が引いてきたワゴンには朝食が乗せられていて、いい匂いが部屋を満たす。
侍女はそれらを手際よくテーブルに並べ、紅茶を淹れる。
レオナがストレートティーよりもレモンティーが好きだと知っている彼女は、スライスしてあるレモンとハチミツを紅茶に入れた。

優雅に手を伸ばし、レオナはクロワッサンを一つ取る。
焼き上がってまもないようで、小さく千切ればバターの香りをたっぷり含んだ湯気が立ち上がった。
一口いれれば、さくさくとした感触と焼き立ての甘さが広がる。

ずいぶん前に「とても美味しい」とつい漏らしてから、よく朝食に上がるようになった。
たぶんその呟きを聞いた侍女がコックに伝えたのだろう。

朝食もそこそこに、レオナは少し冷えてしまった紅茶を飲み乾した。
後片付けをする侍女を見つつ、口を開く。

「今日の午前、陛下とご一緒の公務がありますの。陛下のためにも、お化粧はいつも以上に念入りにお願いしたいのだけど」
「専属の化粧師に、そのようにお伝えいたします」
「ありがとう。きっと陛下の御心を捉えてみせますわ」

少し頬を染めて、いかにも陛下に会えるのが楽しみだといわんばかりの顔をした。

ただ着飾って、その見目麗しさで国王の寵愛を得ようとする。
賢いとはとてもいえそうにない、姿形だけを気にするレオナはまさしく、噂のおつむの弱い側室だった。

## 噂と実状？

ただいま午前８時３０分。
午前中に予定されている、レオナの公務は９時から約１時間ほどだ。
その内容は謁見の間にて国民――そのほとんどは貴族だが――からのさまざまな要望、要請を聞くこと。

この公務は週７日のうち６日行われていて、国王と王妃――現国王にはまだ王妃がいないため側室――が出席するのが決まりだ。
ちなみに離宮に暮らす側室はちょうど６人いるので、毎日ローテーションでこの公務をこなしている。
今日はレオナが国王とその公務をこなす日だった。

すっかり身支度を整えたレオナは、落ち着かない様子で自室をうろうろ歩き回る。

レオナ本人選んだ純白のドレスは、見事に彼女の魅力をこれ以上なく引き出していた。
真珠とレースをあしらった髪飾りは、彼女の緩やかに波打つ黒髪を品よくまとめ上げている。
細く白い首筋には、大粒のラピスラズリが輝く繊細な作りのチョーカー。
目鼻立ちがすっきりとしているレオナの顔は、化粧を乗せることでさらに美しさが増していた。

傍には侍女が控えていて、そんなレオナを不躾にならない程度に見遣っている。
が、あまりのその様子を見兼ねたのか、侍女は口を開いた。

「…ハーブティーでも淹れましょうか？」

それは暗に『いい加減に見苦しい、落ち着きなさい』と示す言葉に違いない。

このフォレスタは、自然の多さや資源の豊富さだけではなく、教育体制も整った非常に安定した国だ。
男女問わず最低限の教育――読み書きは義務として、町の教会や修道院にて無償で受けられる。
そんな秩序や情緒を重んじるこの国では、知性あふれる女性が男性に好まれるのは必然というべきか。

寡黙ながらも臣下から信望される、現国王の女性の趣味もそうであろうともっぱらの噂だ。
着飾ることをなによりも気にし、おつむが弱い娘などもってのほか。
けれどレオナは、そんなことには気づいていないというふうに侍女に眩しいくらいの笑顔を向ける。

「いいえ、けっこうよ。ああ、陛下にお会いできるそのときが待ち遠しいわ」

侍女はもうなにも言わず、主に気がつかれないように嘆息するばかりだった。

結局レオナは、公務までまだ２０分もあるというのに謁見の間に出向いた。

今にも飛び立ちそうな、傍から見ても浮かれた彼女の足取りは、淑女というにはまだ早い幼い娘のようだ。
仮にも側室の一人であるのにと、すれ違ったメイドや大臣たちは表面上は挨拶こそするが、内心は彼女を笑うばかりだった。

あとこの空中廊下を進み、階段を下りれば謁見の間だというところで、向かいから国王が歩いてくるのが見えた。
背後に宰相たちを引き連れて、なにやら話しながら歩いている。
やがてレオナに気がついたようで、国王は足を止めれば続いていた臣下たちもその歩みを止めた。

一週間ぶりに会った国王は、記憶の中のものと寸分違わぬものだった。
年はたしか２４になると記憶しているが、正直とても年相応とはいえないと思う。
むろん精悍な顔立ちは非常に男性的で、魅力的だとは認めざるを得ないが。

きっと国王ならではの圧倒的な威厳が強すぎるのだ。
落ち着いた風格はとても２０代のものとは思えず、加えて寡黙な態度がさらに年齢を引き上げているのだろう。
色素の抜けたような亜麻色の髪と金緑の瞳は、若干その印象を和らげてはいるようだが、あまり効果はないようだった。

「おはようございます、陛下」

レオナは妖艶な笑みを浮かべて、国王に走り寄る。
細い腕を広げて柔らかく抱きしめ、自分より頭一つ背の高い国王を、彼女は熱を帯びた瞳で見上げた。

国王の後ろに控えた宰相らが、レオナの態度に眉をひそめる。
「人前で、しかもただの側室の一人がそのような態度はいかがなものか…」といわんばかりだった。
レオナはそんな彼らにすら、どことなく勝ち誇ったような笑みを返し、国王に這わせた腕にさらに力を込める。

「お会いしとうございました」

国王はなにも言うわけでもなく、形式的にそっとレオナの抱擁を返すだけだった。

## 噂と実状？

午前中の公務はあっという間に終わり、国王との会話もそこそこにレオナは自室に戻った。
帰りを迎えてくれた侍女には、
「少し気分が悪いからしばらく休みます。昼食も用意しなくていいわ」
といって下がらせ今は一人だ。
午後の公務は、ディナーを交える他国との交流目的の夜会が一つある。
けれどそれまでは自由だったと記憶している。

「それじゃあ公務まで数時間、【側室のレオナ・フライト】はおやすみね」

躊躇いなく真珠をあしらった髪留めを外せば、見事に結い上げられていた黒髪はあっけなくレオナの肩を覆った。
髪留めをドレッサーに置いて、今度はクローゼットを開ける。５着しかないドレスで隠すようにしまわれていた少し大き目の箱を取り出した。
近くのテーブルにそれを置いて、蓋をあける。

そこには今レオナが着ているドレスとは素材から違う、簡素で地味なその衣服とその一式。
離宮で働く侍女の制服が入っていた。

これは誰にも知られてはいけないレオナの秘密だった。
毎朝彼女が自ら衣装を選ぶのもこのためだ、この箱の存在を侍女に

知られてはならない。
無論この側室としては少なすぎる衣装の数も知られてはならない。

レオナは器用に着ていたドレスを脱ぐと、箱にしまわれていた衣装に着替え始める。
ドレスとは違い簡素な作りゆえ、一人でも簡単に着こなせる。
飾り気がないグレーのブラウスに、黒のベスト。裾に少し刺繍の入ったひざ丈の黒いスカートに、黒いタイツ。デザインよりも実用性を重視した皮靴はとても歩きやすい。
最後に邪魔にならないよう髪を簡単に編み込み、白いエプロンをすれば完璧だ。

ドレッサーの隣に置かれている姿鏡で、一応その姿をチェックする。と、化粧を落とすのを忘れていた。
部屋に続く洗面所で、いつも以上に綺麗な仕上がりを頼んだ化粧をためらいもなく落とす。

近くのタオルを手にとって顔を拭けば、もう妖艶な笑みと化粧で他者を惑わすようなレオナはいなかった。
あるのは作られた側室のレオナではなく、ただのレオナの――年相応の純粋に愛らしい――顔。

さすがにすっぴんでは天気のいい今日は日差しが強いので、化粧水と乳液をなじませる。
唇にはほんのり色のついたリップクリームを塗ればもう十分だった。

すっかり侍女に化けたレオナは、辺りを見回してから自室を出る。
足早に部屋を離れて、まずは調理場に向かった。

そろそろ昼食の支度がはじまるのだろうか、調理場は少しあわただしかった。

「おはようございます、スレイさん」

「お、どうしたレナ。またレオナ様からのお使いか？」

カウンター越しに厨房をのぞけば、すっかり顔なじみになったコックがいた。

スレイという名のコックは、野獣のように大柄の男だった。年は５０を過ぎたあたりくらいだろうか。

ボールでなにやらかき混ぜながら、スレイはレオナ――もといレナのところまでやってきた。

「はい、昨日お願いしておいたクッキーを受け取りに参りました」

「ああ！　あれな、用意できてるぞ。ちょっと待ってろ」

抱えていたボールを調理台に置くと、スレイは奥に姿を消した。

しばらくして戻ってきた彼の右手には、木のツルで編まれた大きめのバスケットが、左手には数枚のクッキーが乗った白い皿があった。

うち差し出されたバスケットをレナは受け取る。

「ほれ、これだ」

「ありがとうございます」

「んで、これはお前さんの分だ」

「え？」

数枚のクッキーが乗った皿も差し出された。

目を丸くするばかりのレナに、スレイは笑いかける。

「甘いもの好きだろう？　顔がにやけとる」

スレイの言葉に、レナは反射的に自分の顔に手をやってみる。
けれど分かるわけもない。
なんだか恥ずかしいと俯いたレナに、笑いながらスレイはお茶を出す。

「少しくらい時間あるだろう？　御側室様の派手なお茶会とは天の地の差だろうが、食う間は息抜きしていけ」
「それじゃあ少しだけ…。それと一つ訂正させていただきます、わたくしはこういった雰囲気のほうが好みです」
「こんなおっさんと茶してもつまらんだろうが」
「無理に着飾った堅苦しいところよりも、気楽でいいと思いますわ」

にっこり笑って、クッキーを一つ頬張る。
プレインとココアのマーブルクッキーは、バターの甘さとカカオのほろ苦さが絶妙だ。
淹れてもらった紅茶も最高級茶葉とは違うが、優しい味はほっとする。
ついつい手の進むレナを、スレイは満足そうに見ていた。

ふとそんなレナの手が止まる。

「あ…スレイさん、一つレオナ様から言付けを承って参りました」
「おう、なんだ？」
「明日の昼食はまた１０人前お願いしたいそうです」
「了解～」
「よろしくお願いします」

それにしても、とスレイが首をかしげる。
野獣のような巨体の彼が顎に手を当てて考える仕草は、その見た目と違いとても可愛らしい。
くすりと笑うレナに気がつくこともなく、スレイはさらに呟く。

「あの細いレオナ様のどこに、そんだけ入るんだかなあ…」
「あら、それでもまだ足りないこともある、とおっしゃっておられましたわ」
「まじかよ、俺よりすげえ腹なんだな」
自ら腹を揺するスレイの仕草に、今度は声を出して笑ってしまった。

## 噂と実状？

スレイとのゆったりとしたお茶会を楽しんだ後、レナは彼から貰ったバスケットを抱えて離宮から王宮へと足を運んでいた。
侍女の姿の今は、誰にとがめられることもなくあっさりと城下町に続く門までたどり着く。
門兵に主から城下町まで買い物を頼まれたといえば、簡単に出してもらえた。

城下町までの道を歩きつつ、レナは振り返る。
王城とこの城下町をつなぐ石作りの大きな門は、２階建ての家よりよっぽど高い。
レナより大きな石を何個も重ねて作られていて、城というよりも要塞のような重苦しさがあった。

違う。牢獄のようだ、とレナは思う。
少なくても自分にとっては、牢獄そのものだと思う。
それでもそこで生きていくしかないレナは、苦々しい思いに顔をしかめる。

今はまだ無理だ。
飛び出すにはまだまだ準備が足りなさすぎる。
側室にと王城に上がって早半年、これだけ時間をかけてできた準備はこの侍女服を手に入れたことだけだ。
まだまだ時間はかかるだろうが、一生ここにいるつもりもない。
抱えるようにバスケットを持つ手に、無意識ながら力がこもる。
あの城に、自分の味方はいない。

少なくても【側室レオナ・フライト】にはいない。
否、つくらない。
出ていくときは一人でいいと、ここに連れてこられたときに決めたから。

レンガで舗装された城下町への道は歩きやすく、２０分も歩かぬうちに到着した。
貿易で賑わう町は、王城の雰囲気とは全く違う。
王城は厳かな雰囲気ばかりだが、町は常に活気に溢れていて、きちんと人がここに居て生活しているのだと感じられる。

もともとレオナは修道院暮らしで、王城の生活に近い静かで落ち着いた毎日を主としてきたが、こういった雰囲気も好きだった。
今は特に【側室、レオナ・フライト】として我慢を要する生活をしているせいか、開放的な町の雰囲気に惹かれるのだろう。

賑わう市場を眺めながら、レナは町から少し外れた場所に向かう。
なだらかな小麦畑を過ぎ、のんびりと草をはむ牛たちの牧場を過ぎ、やがてそれは見えてくる。
古めかしいデザインながらも、どこか荘厳なその建物。
高い屋根の上に掲げられた十字架は、ここが教会だと示していた。

そのまま表から入ることをせず、レナは裏に回る。
頼りない木の柵の扉を開け、裏門をたたく。
まもなく出てきたのは、ここの神父である初老の男性だった。

「こんにちわ、神父様。本日もよろしくお願いします」
「ようこそ、レナ様。こちらこそよろしくお願いします」

にこやかに笑う神父に、レナはもってきたバスケットを差し出す。

「子供たちのおやつにとお持ちしたのですが、受け取っていただけますか？」
「ありがとうございます、きっとあの子らも喜びます」
「そういっていただけると、こちらも嬉しいです」

さあどうぞと、神父はレナに中に入るように勧める。
その穏やかな神父の雰囲気に、王城に来る前の生活を思い出してなんだか切なくなった。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8235z/

---

噂の側室

2011年12月29日02時54分発行